

そ の 他

特色G P シンポジウム「大学における『学びの転換』と 学士課程教育の将来」

はじめに

2009年2月16日（月）、東北大学高等教育開発推進センター主催の特色G P シンポジウム「大学における『学びの転換』と学士課程教育の将来」が開催された。これは、平成18年度特色G P に採択された東北大学全学教育「基礎ゼミ」の取り組みを、大学における「学びの転換」の起点と位置づけたもので、本年度が最終年度となることから、総括シンポジウムとして、中央教育審議会『学士課程教育の構築に向けて（答申）』（2008年12月24日）を踏まえて、この分野の専門家を招聘して行われた。

弘前大学でも「基礎ゼミナール」を開講し、大学教育において重要な起点をなすとの認識から、東北大学の「基礎ゼミ～『学びの転換』」に注目し、本『21世紀教育フォーラム』（創刊号、2006年）「他大学の授業改善への取組の紹介—東北大学の『基礎ゼミ』—」と題して紹介するなど、互いに共通する問題が含まれた。参加者の立場から、弘前大学における初年次教育との関連から、そのいくつかを、以下に簡単に報告する。

特色G P 東北大学高等教育開発推進センター主催の特色G P シンポジウム

平成18年度特色G P に採択された東北大学全学教育「基礎ゼミ」の取り組みを、大学における「学びの転換」の起点となることをめざして行われます。しかも同時に、初年次教育と関連する大学全体の状況と関係性について、東北大学全学教育「基礎ゼミ」の取り組みを、大学における「学びの転換」の起点と位置づけたもので、本年度が最終年度となることから、総括シンポジウムとして、中央教育審議会『学士課程教育の構築に向けて（答申）』（2008年12月24日）を踏まえて、この分野の専門家を招聘して行われた。

大学における「学びの転換」と 学士課程教育の将来

日時 平成21年2月16日（月）13:00～17:00

会場 東北大学川内北キャンパス 教育・学生支援部管理棟3階大会議室
(仙台市青葉区川内4-1)

司会進行 関内 隆（東北大学高等教育開発推進センター長）
進行役 関内 隆（東北大学高等教育開発推進センター教授）

- ① 大学における「学びの転換」とは
松下 佳代氏（京都大学高等教育研究開発推進センター教授）
- ② 初年次教育から見た「学びの転換」
川島 登二氏（国立教育政策研究所高等教育研究部研究開発課）
- ③ 「学びの転換」と思考力表現力
井下 千以子氏（京都府立大学心理・教育学系教授）
- ④ 理系分野の学びの転換に必要な2つの要素—「基礎」と「実践」—
小笠原 正明氏（東北大学理学部教授）
- ⑤ 文化の継承と「学びの転換」
関内 隆氏（東北大学高等教育開発推進センター教授）
- ⑥ 学士課程教育と「学びの転換」
新井 正吉氏（元国公立大学学長・東北大学学長）
- ⑦ パネルディスカッション：学士課程教育の将来に向けて 司会：関内 隆

当日参加費は、
どなたでも
ご参加
いただけます。

問い合わせ先 東北大学高等教育開発推進センター 関内 隆 022-755-7554
ご所属・ご住所・連絡先を明記の上、2月12日（木）までにメールにてお申込みください。
東北大学高等教育開発推進センター 総務課 〒022-755-7554 symposium@edu.ni.ac.jp

主催：東北大学高等教育開発推進センター
共催：東北大学教育政策推進協議会

大学における「学びの転換」とは

京都大学高等教育研究開発推進センター松下佳代から、本テーマ「学びの転換」に関する重要な問題提起がなされた。「学びの転換」における高校との連続／断絶の関係をどのようにとらえるかという問題である。標題では、「大学における」となっているが、高校教育での「転換」はないのかとして、京都市立堀川高校の事例をあげながら、大学入試の在り方についても問題提起された。また、「転換」とは、1回的なのか連続的に繰り返されるものかに関連して、「Learn－Unlearn－Relearn」の用語を用いての説明があった。

“Unlearn”については、鶴見俊輔（1994）「Unthink をめぐって―日米比較精神史」京都精華大学出版会編『リベラリズムの苦悶』阿吽社の「毛糸玉のメタファー」の事例「一度編んだセーターをほどく、ほどいた同じ糸を使って自分の必要にあわせて別のものを編む」を紹介し、「過去に学んだことをいったんほどいて、必要にあわせて学び直すこと」を「学びの転換」とパラフレーズしたのが印象的であった。「転換」とは、高校までの教育を「否定」して、新たに大学教育で教えるのか、それとも高校教育を延長したものか、大学教育をどのように位置づけるか重要な問題であるが、「毛糸玉のメタファー」を用いて説明した。「転換」は、別のものに変えるチェンジ(Change)という意味合いがあるが、「特に、傾向・方針などを、違った方向に変えること」（大辞泉）とあるように、方向転換を意味するものと思われる。

初年次教育から見た「学びの転換」

国立教育政策研究所・川島啓二は、タイトルが示唆するように、初年次教育との関連から「学びの転換」について報告した。最近の中央教育審議会『学士課程教育の構築に向けて』の答申にもとづいて、初年次教育を「高等学校や他大学からの円滑な移行を図り、学習および人格的な成長に向け、大学での学問的・社会的な諸経験を成功させるべく、主に新入生を対象に総合的につくられた教育プログラム」と定義づけた。答申の「構築に向けて」は、まだ構築されていないとの印象を与えるのではないかに関連して、審議当初は、「再構築」という言葉が使用されたとの説明もあった。これからも、学士課程教育の構築はこれから本格的に動き出すことになる。

初年次教育の領域に関連して、国立教育政策研究所の調査分類が、以下のように紹介された。

- ①スタディ・スキル系（レポートの書き方、図書館の利用法、プレゼンテーション等）
- ②スチューデント・スキル系（学習生活における時間管理や学習習慣、健康、社会生活等）
- ③オリエンテーションやガイダンス（フレッシュマンセミナー、履修案内、大学での学び等）
- ④専門教育への導入（初歩の化学、法学入門、物理学通論、専門の基礎演習等）
- ⑤教養ゼミや総合演習など、学びへの導入を目的とするもの
- ⑥情報リテラシー（コンピュータリテラシー、情報処理等）
- ⑦自校教育（自大学の歴史や遠隔、社会的役割、著名な卒業生の事績など）
- ⑧キャリアデザイン（将来の職業生活や進路選択への動機づけ、自己分析等）

以上の分類からもわかるように、初年次教育における「学びの転換」は、高校と大学の「学び」とは、基本的に違うという前提に立っている。その結果、各大学における初年次教育プログラムも多様で、「ごった煮」の状態にある。これは、初年次教育の基本的なジレンマでもある。

「学びの転換」と思考力表現力―自分で考えて表現する力―

桜美林大学心理・教育学系井下千以子は、最近、『大学における書く力考える力―認知心理学の知見をもとに』（東信堂、2008年）を刊行し、さらに第1回関西FD連絡協議会シンポジウム「Writing Across the Curriculum とFD―書く力考える力を育む学士課程カリキュラムを目指して」と題して報告していることから、ライティングの問題をFDと絡めた問題提起をした。

井下は、東北大学の基礎ゼミを「専門教養型」と位置づけ、「ディシプリンでの学習を重要しつつも、狭隘化することなく、学部横断的なクラス編成によって、幅の広い学びが取り入れられている」と説明した。転換期の初年次教育の課題を「学習技術型」と「専門教養型」に分類して、前者をレポートの基本様式、効率的、生産的なもので、「知識の積み上げ」とした。また、後者は学びを深めるレポート、創造的、発見的なもので、「知識の再構造化」とし、「学習技術型」から「専門教養型」への転換、すなわち、学習観の転換が必要であると述べた。これをライティングに置き換えて、「知識の積み上げ」は「知識叙述型ライティング」(Knowledge-telling)で知識や技術の「教え込み」に過ぎないが、「知識の再構造化」では、「知識変換型ライティング」(Knowledge-transforming)で深い学びへと誘う、この場合「教え込む」ので

はなく、学生の主体性を重視し、「支援」することが重要であると指摘した。

また、最新の「コピペの問題」を取りあげ、情報をそのまま、自分で考えずに、盗用することには、大学での学びの重要な部分が欠如していると指摘した。すなわち、学びを「自分のことば」で表現していない。知識の再構造化が行われていないと指摘した。重要なことは、「書くという学習経験を通して、考えるプロセス（知識の再構造化）を支援すること」と述べた。さらに、「書くこと」は、思考を深めるとして、メタ認知およびモニタリング機能の重要性を指摘し、アカデミック・ライティングの導入を示唆した。この報告は、ラーニング・ポートフォリオとも関連するもので興味深く聞いた。

学士課程教育と「学びの転換」

絹川正吉の報告は、いつ聞いても刺激的で楽しい。冒頭で、伊藤乾『バカと東大は使いよう』（朝日新書）の「先生さー、いったい何やらせたいの？よくわかんねーんだよね。これやれっていつてくれたら、それやってやっからさ。なにやったら優くれんの？」（文科Ⅰ類の学生）を紹介して、だから「学びの転換」が必要なのかと問題提起した。

東北大学高等教育開発推進センター編『大学における「学びの転換」とは何かー特色ある大学教育支援プログラム（特色GP）東北大学シンポジウムⅡ』（東北大学出版会、2008年）の山岡道男「経済教育に見る高等と大学の連続・転換ー国際比較の視点からー」から、以下の文章を紹介した。

- ・「高校での一方向性の知識伝達型授業からの転換」
- ・「高校までの一方向的授業方法から双方向的授業を進めるために」
- ・「大学入学以前の教師主導型を主とする学習からの転換を図り、大学における自主的な学習へ」
- ・「受身の知識・技術の習得を中心とした受験学習の『型にはまった思考』から」

これでは、悪いのは高校までの教育ということになる。しかし、上記の文章の「高校」のところを「大学」に置き換えることもできるとして、「学びの転換」とは大学教育改革ではないかとユニークな問題提起をした。責任転嫁では問題は解決しない。

また、浪川幸彦「数学における高等学校と大学の連続・転換ー数学教育の視点からー」にもとづき、言語力の重要性を指摘した。学生の一般的言語力が脆弱化しているとして、①論理的思考とは逆ベクトル、②情緒的表現の蔓延、③言葉の運用範囲が狭隘（仲間うちだけで通用することばの世界）をあげ、単なる知識の積み上げではなく、学問のエロスの伝達、英語でアカデミックリーディング、ライティングの重要性をあげた点は、井下の報告を裏打ちしたものである。数学者の視点からの言語力の強化は傾聴に値した。

絹川は、学士課程教育を「学術基礎教育」ととらえている。この学術基礎教育の視点について、絹川は、「専門（ディシプリン）教育との連関を意識しつつも、その基盤となる表現力や思考力の育成」であるとして、その目標（評価項目）を、①思考法についての重要な変化を経験したか？、②自分で考える力をつける助けとなったか？、③単に知識の記憶を超えた精神の働きかけを受けたか？、④英知に裏打ちされた知識の本質に触れたか？、⑤創造的思考の場に参加できたか？をあげた。

（文責 土持ゲーリー法一）